

『ポリフォーン』Vol. 4 (1989年6月)

特集=音楽と時間

編集：サントリー音楽財団

発行：TBSブリタニカ

1989-16 1/2

る彼

二年後の一九  
 〇〇年ヨハン・キリ  
 ンによって、マラーに  
 関して編集するという形  
 で  
 出た。しかし、まもなく世は第三帝国に  
 入った。これらはユダヤ人に対する尊敬をこめ  
 て、大戦が終り、平和がよみがえったときも  
 この本は再版されることがなかった。そのため  
 長い間この本はマラー研究者にとって入手困  
 難な幻の書物に近い存在となつてしまつた。戦  
 後マラーの復活が行われ、日を追うにつれて  
 マラーの声価が高くなつていったにも拘らず、  
 本書は長い間、闇に眠つていた。これを再び世

あること。しかも、人類学の訓練もみっちり積  
 んでいること。優れた音楽家の感性と専門家の  
 調査能力とが幸福にとけあつて、稀にみる「音  
 の民族誌」が誕生した。

調査地は、バプア・ニューギニア中央部の熱  
 帯雨林。色とりも鮮やかな極楽鳥や他の鳥たち  
 が、こずえに葉蔭に鳴き交わしている。そこに  
 住むカルリ社会の人びとは、とりわけこの鳥た  
 ちに、自分たちの世界の象徴的なあり方をみて  
 いるのだ。

フェルドはたまたま録音テープで、カルリの  
 人びとの歌ごえを聴き、彼らの音楽のとりこに  
 なつた。それでわざわざ、ジャングルの奥まで  
 調査に出かけていった。

フェルドが幸運だったのは、カルリ社会の言  
 語や文化について、かなり予備知識があつたこ  
 とである。テープの持ち主は、人類学者のシェ  
 ーフェリン夫妻だったが、彼らはひと足さきに  
 カルリ社会を調査して、「孤独なる者の哀しみ  
 と踊り手の火傷」なる書物を出版していた。そ  
 して手取り足取り、フェルドにカルリ文化の手  
 ほどきをしてくれた。だからフェルドは、社会  
 構造がどうのといった、いわゆる民族誌は彼ら  
 にまかせ、音環境や音文化に関する調査・研究  
 に集中できたのである。

異文化に飛びこんで、音のことしか調査しな  
 いなんて、ずいぶん突飛かもしれない。しばら  
 く前の人類学なら、そんなもの受け付けなかつ



ステイブ・フェルド著  
 山口修・山田陽一・ト田隆嗣・前田隆則/共訳  
 『鳥になった少年』  
 平凡社 4300円

「ムニ鳥の声を聴くと、音風景がみえてくる」  
 文句なしにすばらしい、とまず言おう。ある

の研究はかなり進んで、  
 記録から新しくなにかを発  
 見しよう。本書が最も面白いと、  
 年寄り添ってマラーの妹と共に  
 を演じた女性に、機嫌のいいマラーが  
 私的な側面と、ある種の放言や夢をまじえ  
 葉である。そこには無警戒な言葉のスリッパも  
 あり、このまぢがいなく奇人伝に入るような芸  
 術家の実像を面白く見せてくれる——特にい  
 つかのオペラのマラー流の演出を語る部分は  
 興味をひくはずである。

たろう。けれども、時代は変わった。J・ブラ  
 ッキングやC・カイルの仕事は、音楽の人類学  
 がみのり豊かなことを教えてくれたし、M・シ  
 エーファーが唱えたサウンド・スケープ(音風  
 景)の考え方も、すっかりおなじみになった。  
 構造主義のかた、ヨーロッパ調性音楽の優位  
 をうかつに信じられなくなった。それと対極的  
 な音風景、音文化をありのままにみつめる仕事  
 が、待ち望まれていたところだった。

フェルドはどちらかと言えば、オーソドック  
 スな構造人類学の立場に立ち、レヴィ・ストロー  
 スやE・リーチの方法に忠実である。それを補  
 ういみで、C・ギアツやD・ハイムズも援用し  
 ている。

そういう分析は、手堅いけれども、型にはま  
 ったむしる窮屈だ。カルリの音風景や音文化に  
 素直に感動しているフェルドのほうがのびやか  
 で、持ち味がよく出ている。  
 とところで、「鳥になった少年」とは、うまい  
 題をつけたものだ。この本は、少年が見捨てら  
 れてムニ鳥(ハトの一種)になるという、印象  
 的な物語から始まっている。ここにすべてのテ  
 ーマが凝縮されていて、絶妙の導入である。

とある川岸で、少年とその姉がザリガニを  
 とつていた。姉はつかまえたのに、弟にはつか  
 まらない。「アデ、僕のザリガニがないよ

お！」そうやってねだつても、姉はわけてく  
 れない。とうとう悲しみのあまり、少年は鳥  
 になつてしまふ。姉は驚いて謝るが、遅すぎ  
 た。少年はエエエエ……と歌つて、飛んでい  
 ってしまった。

カルリの人びとは、互酬(贈与のやりとり)  
 の網の目で結ばれている。食べ物、手に入り  
 次第、みなで分けなければならぬ。なかでも  
 姉・弟の関係はアデとよばれ、互酬の絆がいちば  
 ん緊密なことになつていく。

この互酬の関係から切り離され、孤立してし  
 まつたら、不幸のどん底だ。それはほとんど、  
 死に等しい。だから見捨てられた少年は、鳥に  
 なつた。死ぬと人間の霊は鳥に姿を変えると、  
 人びとは信じている。

霊の種類が違うので、鳥の種類も違う。若い  
 女性の霊(ヒクイドリ)、老年の男性の霊(パ  
 プアオウギワシ)、……。姿がみえなくても鳴  
 き声で、カルリの人びとは、鳥の種類を識別す  
 ける。鳥たちは場合に応じ、いろんなことばを  
 語りかける。「きけよ。あなたにや鳥でも、お  
 れにとつちや森の声なんだ。」(71ページ)

鳥たちの世界は、もうひとつの世界だ。人間  
 社会と鳥たちの世界は連続で、しかも、対立し  
 ている。生/死。文化/自然。カルリの人びと  
 は鳥たちの世界を通じて、自分の社会を認識す

る。そして、それを素材に、自分たちの音文化を組み立てる。

ムニ鳥になつた少年の物語を分析すると、このふたつの世界の関係がみえてくる。フェルドによると物語は、七つのエピソードからなる。(1)拒まれたアデ関係、(2)もらえない食べ物、(3)見捨てられた少年、(4)少年はムニ鳥になる、(5)ムニ鳥の声、泣きの声、(6)ことばの組み込み詩、(7)旋律的な泣き詩歌。

まっけて泣く。女たちの泣きは、下降する旋律をもち、パターン化している。音程やリズムが微妙にずれ、ポリフォニックな効果がある。いつぼう男たちは、儀式や交霊会のように泣く。夜、ロングハウスは人びとで満員になる。暗闇のなか、霊媒師は鳥の扮装をして、ギサロを歌い踊る。人びとは次第に恍惚となり、死者たちの霊(鳥)がその場にいと信じる。

カルリの美学では、悲しみが大きければ大きいほど、その儀式の価値も高い。人びとは、ギサロのくもし出す悲しみの感動に酔いしれ、泣きくれ、最後には興奮のあまり我を忘れて、踊り手に火傷を負わせるのだ。

フェルドはこのあといろいろ、構造主義流の分析を試みている。なにしろこの本の原題は、*Sound And Sentiment*と云つて、その昔R・ニードムがレヴィ・ストロースを擁護して著した『構造と感情 *Structure And Sentiment*』の、むこうを張っているくらいである。ただ、本筋を離れるから、ちょっと省略。

カルリの詩と歌は、一体で、切り離せない。ギサロは、日常使わない独特の語形をもち、複雑な構造をそなえている。ことばにはみんな、表の意味と裏の意味(象徴的含意)があつて、詩的效果をたたえている。

カルリには、歌ないし詩の形式が六つほどある。どれも下降する旋律からなるが、いちばん大事なのは、儀式や交霊会のために歌われる、ギサロである。「ギサロの構造は、ムニ鳥の旋律と同じで、しかも泣きの音律構造とも合致している」(58ページ)。

ほかに、地名も重要である。ゆかりの場所が歌われるたびに、故人と過ごした日々が想いおこされ、ひしひしと哀惜の念がつのる。地名をどういう順序でどう折り込むかが、ギサロの劇的構成にとつて、重要な要素だ。こんなふうに地名が、人びとの共同体験を喚起するのは、和歌の枕詞もかつてそうだったろうと思わせて、興味ぶかい。

葬式のときには、ロングハウス(細長い大きな木造の小屋)に遺骸が安置され、女たちが集

この本で面白い点を、二つあげておこう。ひとつはフェルドが、出版されたこの本を、カルリの人びとに読んで聞かせたことである。人びとは、内容に興味を示し、そのとおり、いや違ふと、ひとしきり議論になった。カルリの人びとが考えてもいなかったようなことまでいろいろ聞きこんで、都合よく作文したのではないか。『鳥になつた少年』があまりみごとな体系なので、そういう嫌疑をかけた学者もいるという。やりすぎもないとは言えまい。だが、カルリの人びとが、鳥の分類に通じ、彼ら流の音楽の理論を持っているという事実のほうが重要だ。ふつう人類学者は、自分の研究成果を現地の人びとに聞かせたりしないが、そういうことをやっても平気なのがフェルドの強みである。

もうひとつは、カルリの音環境や音風景を、読者に彷彿とせしめよう目的で、本と別に、レコード「森の声」を作成したことである。これは生の音そのままではなく、カルリの典型的な一日をフェルドが三十分に編集したものだ。鳥たちの鳴き声や水音など、カルリの代表的な自然音(標識音)が、カルリの音文化にどんなふうに関与しているか、読者が自分の耳で確かめられるようになっていく。

ついでに、気になる点もいくつか。音のことばで説明するのは、やはり限界がある。ギサロを五線譜に採譜してみても、伝わる

### 書評

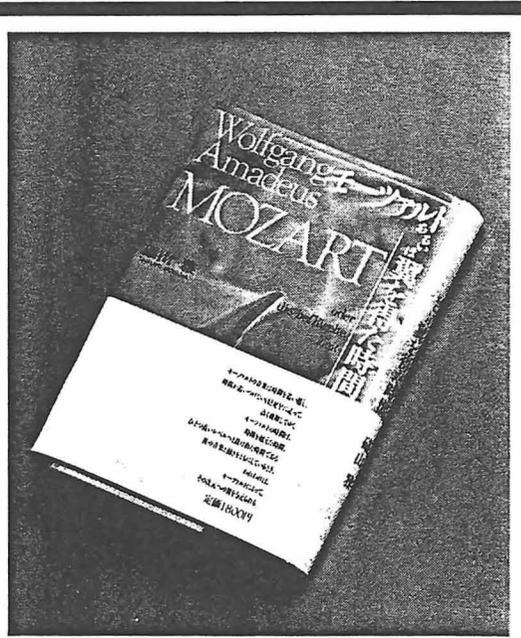
部分と、失なわれる部分があるはずだ。

素材のとりあげ方が、バランスを欠いている疑いもある。民族誌がデータを切り縮め、話を簡単にするのはやむをえないのだが、音環境や音文化の一部分を、恣意的に切り取ったと文句が出てはまずい。カルリの人びとは、鳥のほかにかエルだっている、ムニ鳥以外に他の神話もあるのに、と不満だったそうだ。

交霊会のクライマックスも、歌でなく、霊媒師の口を通した霊との対話であるという。カルリの社会構造がわからないと、音文化の奥行きもつかみにくい。シェーフェリンの本を読めばいいのだから、何かヒントぐらい書いてあつてもよかった。

それはともかくとして、この本は確実に、ひとつの時代を拓いた。

レヴィ・ストロースが野生の世界へ迷いでた哲学者なら、S・フェルドは、野生の世界へ飛びこんだ音楽家である。彼は、ギサロの作り方を習って、作曲や演奏も手がけたという。そういう才能が、われわれに大きなおみやげを手渡してくれたことを喜びたい。



磯山 雅著  
『モーツァルト  
あるいは翼を得た時間』  
東京書籍 1800円

田辺秀樹

没後二百周年の一九九一年も間近に迫って、モーツァルトをめぐる状況が一段と活発になってきた昨年の暮、磯山雅氏の新著『モーツァルト、あるいは翼を得た時間』が刊行され、著『バッハ―魂のエヴァンゲリス』の二冊目の本である。あ、この本を世に贈った磯山、どんなアプロ、買い求う。

よりは、